

最優秀賞（一般部門） 上之段美保

臨床工学技士

私の主人は、27歳で血液透析導入、35歳で在宅血液透析に移行、42歳の時に死体腎移植を行った。今、移植後8年を迎えトライアスロンに参加するほど元気な生活を送っている。これも一重にいつも身近で支えてくれた先生を始め、私たちの治療を指導して下さった臨床工学技士のおかげである。私達の治療の根幹と言ってもいいだろう。血液透析導入8年後、子供達と一緒に時間を取りたいと、在宅血液透析に踏み切った。在宅血液透析は当時サテライト施設では極めて難しく、在宅血液透析を実施している病院へ紹介となった。

この病院で教育指導を受けることになり、一人の臨床工学技士に出会った。医療従事者でない素人に教育するのは、時間も労力も費やすが、なんと主人は、この臨床工学技士の指導の下、穿刺から始まり、返血、抜針方法、トラブルの対処など2週間でマスターした。なぜこんなに習得が

早かったかと言うと、主人が不安にならなかつたことにつきる。血液透析のすべては穿刺で決まると主人は常に言っていた。穿刺も最初は失敗ばかりしていたが、臨床工学技士が、『失敗したら翌日すればいい。在宅血液透析のメリットを最大限に活かして。だから、失敗を恐れず、続けて頑張つて。』といつも励ましてくれた。介助者である私に対しても、『介助者の援助は必要不可欠だが、あくまでも在宅血液透析は患者の自己管理、問題解決のためにも患者自身が行うのが一番、介助者は見守りで。』とってくれる。心がジーンとするほど嬉しかった。

在宅血液透析が順調の中、突然、死体腎移植の話が舞い込んできた。腎移植後、Cr(クレアチニン)値が落ち着かなかつたある日、臨床工学技士が病棟に臨時透析にやってきた。主人のシャントに穿刺して一言言った。『腎臓もお互い探り合っているな。大丈夫と言ってあげな。安心するよ。』と。主人は心の中で毎日言った。『大丈夫ですよ。』と。3週間後、Cr値は下がりだした。祈りが届いた瞬間だった。

